

多文化共生社会における他者とのかかわり方

—多様性への理解を視点に—

A Way for Those Living in a Multi-cultural Society to Coexist with Others

— Understanding Diversity —

西田真琴・多田孝志

(Nishida Makoto Tada Takashi)

【要約】

大きな転換期を迎えた世界情勢を起点とし、繰り返される人間同士の不和を乗り越え、差異、理解といったことをふまえながら文献研究を基軸に他者との共存を検討する。

自己の認識から零れ落ちる他者との出会い、そこから沸き起こる他者への欲望と意のままとならない他者という果てしない葛藤の中で、自己存在を顧みながら他者とどのように関わっていくかを考察し、新たな人間の結びつきを提示する。

キーワード：他者、私、受動性、理解
other, I, passivity, understanding

1. はじめに

世界に大きな衝撃を与えた2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ。これは、闇に包まれたイスラム教過激派組織と強大な国力を誇るアメリカ合衆国という単純な二極対立の形式だけでは片づけられない大きな問題を私たちに投げかけた。

アメリカの国民には多くの移民が含まれる。これを背景にアメリカは、国際色豊かな独自の文化を築き上げていった。しかし世界を揺るがした同時多発テロは、今まで育んできたこの社会に新たな様相を見せ始めている。一連の事件の影響から人種や宗教の壁を乗り越え発展してきたはずのアメリカは、不信感で覆われてしまった。事件の恐怖と屈辱はアメリカをアフガニスタン戦争、イラク戦争へと駆り立てた。敵とみなされた国の人々が、アメリカ移民として生きているかもしれないというのに。徹底的な攻撃は、新たな悲しみと憎悪を招く。正義と安全

の名のもとに始まった戦争は未だ収束の気配を見せない。留まることのない戦争は、今まで協力を敷いてきた各国との不協和音を浮き出せた。冷戦後、平和へと向かっていたはずの世界はここへ来て立ち止まってしまった。

同じ地球上に生きる人類が不和を乗り越え、お互いの違いを尊重し合い、ともに歩んで行く術はないのであろうか。

一度芽生えてしまった不信感、決して元通りとなることはない。不信感、更なる不信感を招き、誰をも疑いの目で見始める。時間の経過とともに不信感、露骨となり、周囲から浮き立たされてしまう。かの太宰治の著作『走れメロス』には、人の心を疑うがゆえに殺戮を繰り返す王が描かれている。「疑うのが、正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ」⁽¹⁾。王の口からこぼれたこの言葉には、疑心暗

鬼におぼれる自身の姿が表れている。

「戦争は新たな戦争を招き、報復を呼び、不寛容は不寛容を生むのである」⁽²⁾。地球上には今も終わることのない戦いと消えることのない憎しみで溢れている。しかし、言葉や文化、人種が違っていたとしても、我々は同様に生物であり、ひとつの命であり、生きているのである。人間は、お互いを殺し合うことを本当に望んでいるのであろうか。お互いを虐げることで平和が訪れると信じているのであろうか。かの王も心の底では平和を望み、他人の信頼を望んでいた。世界は大きな転換期を迎えている。繰り返される悲劇を食い止めるためにも、私たちはどのような社会を築き上げ、どのように人と関わって行けば良いのであろうか。他者と私の存在を中心に哲学的観点から考察し、地球上に生きる一人の人間として未来に生きるための新たな指針を打ち出したい。

2、世界

人間が共に生きるために存在する社会。社会とは「他者と共存する場所」⁽³⁾であり、また多くの人間が存在するからこそ成立する場である。ふと気がつけば、私の日常は他者に囲まれ、他者と関わることで成り立っている。では、他者とは私にとってどのような存在なのであろうか。

「世界は私たちに与えられたものである」⁽⁴⁾。思考すること、感じること、見ることが世界に存在を呼び覚ます。私は青い空を見上げる。私は風の爽やかさを肌を感じる。私は花の美しさに心を躍らせる。私が対象としたものの存在を受け取ることによって、初めて存在は世界に現れるのである。

「初めに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった」⁽⁵⁾

言葉によって存在は明らかにされる。詩人は存在を語る代理人だという。言葉を綴ることで、私たちに見過ごされているものを世界に在らしめることができる。時間であったり、匂いだったり、目に見えないものを確かな存在として現

すのだ。

世界は私に基づき、私によって規定されている。世界は私の意のままとなる。私が語らないことに、世界は存在しない。「すべてがここにあり、すべてが私に属している」⁽⁶⁾。世界が私に起因し、私に取り込まれている。世界の存在をあたかも自分のものであるとすることで、世界での自らの存在を意識するのだ。

3、他者

しかし、他者との出会いは「世界から際立つ出来事」⁽⁷⁾である。人間は存在を欲する。世界の掌握に駆られる私は、他者の出現によって困惑する。他者との出会いは自分の意のままとならないものとの出会いである。確かに、他者は目の前に存在している。だが、いつでも他者は私の思考から零れ落ちている。誰かと諍いが生じてしまったとき。思いがけない言葉をぶつけられたとき。手にとるように他者のすべてを見通すことはできたのであろうか。自分の思うがままに他者との関係を進めることはできたのであろうか。

私は決して他者を捉えることができない。計り知れないものを目の当たりにする経験。それが他者の存在なのだ。

〈触れる〉という行為は、自己を痛感する行為である。相手を求め、触れたとしても、他者を得ることはできない。触感はどこまでも自分を感じさせる。肌は他者と私のあいだにはだかる厚い壁となる。触れた瞬間に、私は自己へと突き返される。「他人に近づくことによって、手は近さをまさに近づきえないものとして体験する」⁽⁸⁾。接触は他者を私のものにはしない。触れることによって、他者へと近づこうとするのは、むしろ他者の永遠の遠さを体験するのである。

「実際、〈出会い〉はいつでも残酷である。しあわせに見える出会いの瞬間も、まさに〈別離の始まり〉であると思えば、むなしいものだ」⁽⁹⁾。他者は決して私のものとはならない。他者の到来は私にとってまさに未知なる存在との遭遇と言えるのだ。

4、欲望

だが、私は他者へと惹きつけられる。私は世界の享受に飽くことがない。なぜなら、私は世界を取り込むことで自己の存在を手にしてきたからである。私の存在への欲望は〈他〉の存在に心を奪われる。世界を自らのものとして取り込む〈同〉の活動は、〈他〉を求める。しかし、これは決して満たされることのない欲望である。他者の永遠の遠さが私の欲望を阻むのだ。

例えば、〈暴力〉。これは私による他者への抵抗である。意のままとならない他者と、他者に近づきえない自分の無力さが、私に暴力を振るわせるのである。そして〈殺人〉。これは、所有欲に駆られた私の最大の挫折である。殺すことで他者を我がものに、意のままにできると信じることは錯覚である。かえって、自己のものとはならない他者の遠さ、存在の高さを明らかにし、自らの欲望の醜さを知らしめる。〈殺人〉は相手を殺すことによって自身の無力さを痛感させるのだ。

もしかすると、〈暴力〉と〈殺人〉によって成立する戦争は、推し進めるほどに力の無力さを表しているのかもしれない。日頃から、私たちは人間をひとつの枠組みに当てはめようと試みる。この試みは、これまでの歴史に名を残した戦いのたびに露骨に行われてきたことである。敵を明らかにするため、戦いの目的を果たすため、自己の正当性を保持するため、善なるものを作り上げ、悪なるものによって他者への抑圧を試みる。

しかし、それは徒労に過ぎなかったのではないだろうか。確かに国であったり、宗教であったり、生きるうえで持ちえるもので人間を振り分けることは可能である。だが、人間を私の前に現れる一個人として考えたとき、その存在の重さは計り知れないものとなる。人間の尊さを力で破壊することは、力では到底及ぶことができない他者の存在の強さを明らかにしてしまう。世界の所有は他者の出現によって、すでに挫折が予言されていたのだ。

しかし、「〈他〉との関係は、〈他〉から遠ざかる運動を逆向きに辿り直すことではなく、〈欲望〉を媒介として〈他〉に赴くこと」⁽¹⁰⁾ であるという。他者へと近づくために、欲望は不

可欠なものとなる。止まることのない欲望を携えたまま、私は他者と出会わなければならない。

5、私

他者は突然どこからともなく現れ、私に世界の所有を問いただす。他者の出現によって私の所有欲は駆り立てられ、意のままとならない他性が私の所有能力を打ち砕く。今まで目の前にしていた世界は、他者の到来によって一瞬にして曖昧となる。〈私である〉ということが揺らぎ始める。自己の曖昧さに私は不安に晒される。私は自らの存在について規定を持つことができないのだ。〈私である〉ということ、つまり「〈私の唯一性〉が際立ったものとなるのは、私が〈他者〉との関係のうちであり、その関係のなかで逃れようもなく〈私〉でしかないことによってである」⁽¹¹⁾。私は〈私である〉ために他者へと向かわなければならない。私は他者によって〈私であること〉を意識する。

どんなに他者を欲しようと、私は〈私である〉ことしかできない。どんなに憧れたとしても、私は他者になることはできない。代わることはない。〈私である〉ままである。誰かとの関わりの中で、私は自分自身を作り上げる。他者を通じて、自己自身を見つめ直す。会話の中で、おぼろげだった思考や感情が明確になることはないであろうか。私は他者によって自分自身を思い知る。他者によって明らかにされる。他者は私にとって、欲望の対象であり、憧れであり、鏡であるのだ。私は他者の視線に敏感となる。他者に望まれるべき私となるように。自己自身を誇れるように。私の在りようは他者によって簡単に左右されてしまう。私は他者の前に立つことによって、初めて〈私である〉ことが可能となるのだ。

6、接近

「〈他人〉を知り〈他人〉に到達したいという大いなる希求は、言語の関係のうちには宿った他者との関係において成就される」⁽¹²⁾ という。他者に出会い、言葉をかける。挨拶は、ここにいる私の存在を現わす。欲望が言葉を発する。言葉は他者へと向かい、他者のために発せられるのだ。

「〈語ること〉は接近するという誓いである」⁽¹³⁾。どんなに厳しいものであっても、他者へとかけられる言葉は誓いであることに違いない。励ましは、他者を支えるための私の存在を伝える。宣告は、これからの未来を他者と共に戦うための私の決意である。命令は、実現を他者にゆだねた私の願いとなる。私から発せられるすべての言葉は、他者へと向かう私の存在の答えとなる。『あなたのためにここにいます』という表明なのである。「出会うと同時にこの出会いそのものを相手に対して必ず表明しなければならないような唯一の存在、それが人間である」⁽¹⁴⁾。私は他者に仕えなければならない。言葉によって、他者に仕える自らの存在をどこまでも伝えなければならない。

しかし、語ることは他者から私を解放することではない。対話が欲望を満たすことではない。むしろ、他者とのあいだにある「絶対的な断絶、底知れぬ深淵」⁽¹⁵⁾を明らかにする。言葉がすべてを解決させてくれることはない。言葉で他者のすべてを理解できることはない。私は他者へ伝えられたのであろうか。他者は私に伝えてくれたのであろうか。語ることには、必ず理解の不安がつきまとう。理解のはざまでお互いの異質性を思い知り、言葉の無力さに深く傷つくのである。

7、受動性

他者へと近づくために、我々が取りうるべき手段とは何であらうか。語ることを越え、「然るべきことがらを然るべき仕方で受け入れ、また同じ仕方で難事もする」⁽¹⁶⁾ということ。存在を引き受ける。対話の中、相手の発言に同意するでも同感するでもなく、その言葉をそのままに受け止める。たとえ、他者によって自分自身が傷ついたとしても、喜びも痛みもそのままに受け止める。そのような接近の仕方が私と他者をつないでくれるのではないであらうか。

「なにもしないということが他人を深く支えることがある」⁽¹⁷⁾。家族や友人の存在。そこには常に議論や競争があるわけではない。日常生活、とりとめもない会話、穏やかな空間である。しかし、誰かがいるということが安らかさを与えてくれる。子どもは、周囲に雑音があるほう

がよく眠るのだという。母親の体内で聞こえてくる血液の流れ、声、生きている雑音が安心感を生み出す。「私は、現代人が失いかけているのは〈話し合い〉などではなくて、むしろ〈黙りあい〉だと思っている」⁽¹⁸⁾。言葉は時に蛇足となる。思いやるから上に生まれる言葉が相手を苦しめてしまうのだ。相手を思いやることに、言葉だけでは足りないのかもしれない。他者に歩み寄り、支えようとする姿勢が必要なのだ。ただそばにいる。同じ空間に身を寄せ、同じときを過ごす。それだけで人を勇気づけることはできるのである。

逃れることのできない受動性。存在を引き受けることによって、私はどこまでも身を曝さなければならない。絶望的な苦しみを伴ったとしても、言葉が刃物となり私を傷つけ、他者の視線に足がすくむことがあったとしても、私はどこまでも他者を引き受けなければならない。「存在欲求である自分自身が解体してしまうまでに他者の罪と弱さと悲惨と死を背負う」⁽¹⁹⁾。他者の存在を負うことが、私の存在意義なのである。

我々は「本質的に他人のために〈存在する〉」⁽²⁰⁾のだという。私は他者によって存在する。私と他者のあいだにはすでに存在の不均衡があったのだ。私は他者に憧れ、他者を欲し、他者をただひたすらに想い続けるしかない。他者から逃れられないのだ。「人間の存在の意味は、自己実現にあるのではなく、善なる行為のうちで自己を消耗し、他者に尽くしぬくことの中に空無と化し、ついには自己解体することのうちに、あるのである」⁽²¹⁾。他者へと近づくために、私は他者の存在を受け止めることしかできないのだ。

8、おわりに

他者との共存のために、理解が叫ばれている。しかし、分かり合えると確信して他者との関係に挑むことは困難である。過剰な理解は挫折の危険性を帯びる。理解の深まりをとどめるような事態が発生すれば、両者の関係はたちまち頓挫する。理解を求めることすら、障害となる。理解が軋轢を生んでしまう。

古代ギリシアの哲人ソクラテスは、対話によ

る公共的同意を求めるといふ思考方法を取った。考えの異なる二人の人間の対話によって真実が明らかされる過程には、両者の厳しい思考による闘いがある。それは、内なる闘いである。両者は命題によって思考が吟味される。両者は対話によってともに理解の挫折を味わう。結果的に自己矛盾に陥るような真理が得られたとしても、両者は最後に癒されうる。そこには理解を越えてまでも知ろうとする、ひとつの目的があるからである。

「〈理解〉とは、しばしば誤解されているように、その人と同じ気持ちになること、合意を得ることではない」⁽²²⁾。苦しみや困難、喜びや感動は理解されるものではない。共に「分かち持つ」ことである。分かり合うということは、共有するということなのであろう。他者の体験を私がおなじように体験することは無論できるはずはない。分からないということを前提にそのままを受け止めるのである。

私は他者を想い続ける。他者を尊重し、共に手を取り歩いていくために、私は他者を追い求め、存在を引き受ける必要があるのではないであろうか。

《註》

1、文中の「私」には普遍的意味合いをもつ。

《引用文献》

- (1) 太宰治「走れメロス」新潮社 P 348 1967年
- (2) 鶴見俊輔「定義集」—エラスムス「平和神の慨き」筑摩書房 P 348 1990年
- (3) 奥村隆「他者という技法」日本評論社 P 218 1998年
- (4) E・レヴィナス 西谷脩訳「実存から実存者へ」講談社 P 72 1996年
- (5) 「新約聖書・ヨハネによる福音書」
- (6) E・レヴィナス 合田正人訳「全体性と無限」国文社 P 38 1989年
- (7) E・レヴィナス 西谷脩訳「実存から実存者

へ」講談社 P 74 1996年

- (8) 鷺田清一「まなざしの記憶」TBSブリタニカ P 84 2000年
- (9) 寺山修司「両手いっぱい言葉」新潮社 P 110 1997年
- (10) E・レヴィナス 合田正人訳「全体性と無限」国文社 P 78 1989年
- (11) 熊野純彦「思想」—所有することのかなたへ岩波書店 P P 73 1997年
- (12) E・レヴィナス 合田正人訳「全体性と無限」国文社 P 91 1989年
- (13) E・レヴィナス 合田正人訳「存在のかなたへ」講談社 P 27 1999年
- (14) E・レヴィナス 合田正人訳「われわれのあいだで」法政大学出版局 P 13 1993年
- (15) 岩田靖夫「倫理の復権」岩波書店 P 238 1994年
- (16) アリストテレス 高田三郎訳「ニコマコス倫理学」〈上〉岩波書店 P 158 1971年
- (17) 鷺田清一「まなざしの記憶」TBSブリタニカ P134 2000年
- (18) 寺山修司「両手いっぱい言葉」新潮社 P 117 1997年
- (19) 岩田靖夫「神なき時代の神」岩波書店 P 32 2001年
- (20) ハイデガー 桑木務訳「存在と時間」〈上〉岩波書店 P 236 1960年
- (21) 岩田靖夫「倫理の復権」岩波書店 P 240 1994年
- (22) 鷺田清一「まなざしの記憶」TBSブリタニカ P66 2001年

《参考文献》

- 「文化の否定性」青木保 中央評論社 1988年
「神の痕跡」岩田靖夫 岩波書店 1990年
「神なき時代の神」岩田靖夫 岩波書店 2001年
「ヨーロッパ思想入門」岩田靖夫 岩波書店 2003年
「国際理解教育をとらえ直す」永田佳之
「人間はわかりあえるのか」原ひろ子 PHP 研究所 1976年
「神・死・時間」E・レヴィナス 合田正人訳 法政大学出版局 1994年